

16 先進モデル
果樹コンクール大臣賞

宮崎県のJA宮崎中央マンゴー部会長の藤元学さん(61)と、妻の美紀さん(56)は、マンゴーを低樹高に仕立てて作業を省力化し、高品質な果実を生産する。マンゴーの加温栽培は、燃油代が課題だったが、ヒートポンプで燃油高騰を乗り越え、冷房機能を生かし出荷期を前進化、高収益農業を実現した。

藤元学さん・美紀さん (宮崎)



マンゴーの色を美しく仕上げるためにひもでつり直す藤元学さんと美紀さん(宮崎県国富町)

低樹高 作型変え 増収

は20〜25年なので平均の約3倍という大規模経営だ。家族努力だけで大規模経営が出来る秘訣(ひけつ)は、低樹高栽培だ。今年で定植18年目

は20〜25年なので平均の約3倍という大規模経営だ。家族努力だけで大規模経営が出来る秘訣(ひけつ)は、低樹高栽培だ。今年で定植18年目

は20〜25年なので平均の約3倍という大規模経営だ。家族努力だけで大規模経営が出来る秘訣(ひけつ)は、低樹高栽培だ。今年で定植18年目

指した」と説明する。味が日本人好みの「アウイン」種は、赤い果皮の美しさが特徴だ。果実が卵大になると一つずつひもで上部からつり、20日に1度向きを変え、均一に日光を当てる。

樹体より上でひもを結ぶため、樹高が高いと脚立が要る。藤元さんは「部会員の70〜80%が樹高2.5m以上。うちは脚立を使わない。脚立を持つ

夜冷で出荷期前進化

て移動し乗り降りする時間がないので、能率が上がり小人数で経営できる」と分析する。

低樹高は品質にも好影響する。「葉より上に果実があるので秀品率が高まる。樹高が2.5mになると果実が葉の下になってと果実が葉の下になってしまふ」と指摘。品質でABCの3段階に区分するが、AとCでは市場価格が2倍も違う。藤元さんのA品率は部会平均を30%上回る約75%、高値で取引される大玉の3L以上も部会平均を11%上回る59%で、5100万円円の粗収益をあげる。

燃油の高騰で2010年からヒートポンプを導入。光熱動力費を137.7万円から52.8万円に60%削減した。13年から単価を維持できるように「ヒートポンプの冷房機

を活用、9月に15度以下に夜間冷房して花芽分化を促し、安定して3月から出荷できるようにした。せん定や冷房、昇温の時期を変えて組み合わせることで、5棟のハウスの作型を変え、3〜5月の中に出荷時期を分散させる。

着果は安定し10%平均収量は、県平均の1.7トを上回る2.1トになる。現在約40人の部会員が「夜冷栽培は早く被覆するので台風は遭うリスクもあるが、安定して早期出荷でき、中には2月に出荷する人もいる。仕事が分散して楽になった。6月の出荷ピークも解消し平準化したため、販売単価を維持できるようにした」と評価する。